

森瀧春子講演

「核と人類は共存できない」

皆さま今日は。私は広島からまいりました森瀧春子です。こういう機会に皆さまに会えて、本当にうれしく思っています。歳を取っていますし、拙いお話しかできませんが、皆様と一緒に平和と戦争、そして核の問題を考えていかれたら良いと思います。皆様に考えていただく資料の提供だと思って、聴いて頂けたらと思います。(拍手)

いきなり硬いお話になりますが、先ほどの朗読劇をお聞きして、今の問題を真剣に考えているんだなと伝わってきます。今の世界を考えるときに、今の状態というのは危機的で、人類が生き延びれるのか、あるいは滅ぼされてしまうのか、そういう瀬戸際にあると言つても過言ではないと思います。ご存じのように3年目に入っているロシアによるウクライナへの侵略、ずっと続いている戦争、侵攻しているロシアは核を持つ国ですから、「核を使うぞ」という威嚇を何度もしてきています。いざとなつたら使いかねない状況にあります。ロシアは、ウクライナの背後には西欧諸国・アメリカを見据えておりま

すので、世界を相手に戦っている状況ではないかと思います。

同時に、もう2年になるイスラエルによってパレスチナ・ガザに対するひどい攻撃が、朗読劇にもありました。日々起こっている映像とか報道で見るしかないですが、直接見ることができませんが、これが現実かと思うような残虐な行為が、これほどのことが人間に出来るかと思うようなことが目の前で起こっている、しかも長く続いている、これでもか、これでもかという感じで、続いています。これをなぜ、現代社会は止められずにいるのかというもどかしさとともに危機感を覚えていますし、イスラエルでもイスラエルの高官が原爆を使う、実はイスラエルは潜在的核保有国、いわゆる5大核保有国とは一線を画していますが、自ら核保有を宣言したことはないのですが、自ら宣言してしまったという形で、核を使うと威嚇しています。今やその戦争は終わるどころか、ガザの本当に一方的な、母親、女性、赤ちゃんを含む子どもへの、全ての人への無差別な、食料を受取りに来た、そこを狙って、およそ考えられないような、国連の支援も全て追い払う、つまり、ただ爆弾で殺すだけでなく、飢餓という面で全民族を抹殺しようと、いわゆるジェノサイドの様相を呈しています。それを止められないという今のガザの現実が、本当に深刻にありますし、さらにイスラエルは中東、イランへの攻撃、レバノン



世界核戦争の危機

核を持つ国々による核兵器

使用的威嚇

から4年目に入るウクライナ戦争

●イスラエルによるパレスチナ・ガザに対するジェノサイド攻撃

●イスラエル・アメリカによるイラン・中東各国への攻撃

【地球規模での放射能拡散の危機】

●イスラエル、ロシア、アメリカによる原発・原子力機関への攻撃

被爆80周年、日本被団協ノーベル平和賞授賞の今、世界では何が起こっているのか？

への攻撃、中東全体を相手にしている状況を呈してきていると思います。

A photograph of an elderly woman with glasses and a dark beret, speaking into a microphone. She is wearing a light-colored jacket. The background is a blue wall with vertical Japanese text. The text on the right side of the image includes the words 'の現状は?' (Current state?) and 'の加担' (Involvement). The text on the left side is partially cut off but appears to be a continuation of the same theme.

こういう状況の中で日本被団協がノーベル平和賞を受賞したのは、今の核戦争の危機を止めたいということが非常に強く表れていると思います。もちろん被爆者の人たちが苦しい中から自ら立ち上がり、自らを救うことが世界を救うという最初からの運動の理念の基に、ずーと粘り強く、最初に始めた人達はこの世にはいないわけですが、それを継いで、今生き残っている被爆者の人たち、一生懸命、自らの体験を晒して、話し続けている、自らを救う原爆援護法を求めて、まだまだ続いているのが現状だと思います。それだけではなく、今、世界的規模での放射能の拡散の危機というのは、イスラエル・ロシア・アメリカによっています。ロシアはウクライナでチェルノブリ原発、ザポリージヤ原発（ヨーロッパ最大）への攻撃を平氣でしている。ここを攻撃すればどういうことになるかは、チェルノブリや福島の原発事故を思い起こせば、充分に分かるはずのことです。取り返しのつかないことになるのは分かっているのに、危機的状況をもたらしているのが現状です。被爆80年、世界は生き残れるかどうかの瀬戸際にあると、私は思って動いてきました。

日本（の国民）は平和憲法を守るということです。頑張って来られています。今の日本（政府）の現状は世界の核戦争に加担している、あくまで核に依存した安全保障政策をとっています。オバマ政権の時に先制核攻撃を止めるという方針を出しかけたことがあります。一応、核なき世界をとオバマ大統領は言っておりました。しかし、先制核攻撃を止める、これは実は当たり前のことなのですが、そういう政策を

取らないでくれと日本外務省から水面下で働きかけ、アメリカが言うことを聞いてくれないから、核抑止に頼っている国々を集めて、アメリカに圧力をかけました。結局、ア



平和憲法の三原則：

國民主權・基本的人權・平和主義

メリカはこれまでの核政策を維持し、核の先制攻撃をしないという政策をとっているのは中国だけ、という状況です。一触即発で何かあれば、為政者たちは核戦争になればどうなるか、当然わかっていると思うのです。にもかかわらず、平気で言って来たし、いうだけではなく使いかねない、そこに日本が後押ししている状況です。

つい先だってですが、暴かれたのは昨年から日米で核兵器を実戦使用する、台湾有事であるとか、中国を仮想敵国にした政策をとっているので、対策を立てる、シミュレーション、何か起きたときは日米が提携して核兵器を使うということを何度も協議している、こちらでは大きく報道されなかったと思うが、広島では中国新聞の第1面に大きく出ました。アメリカの国防総省が中心になって、こういうことを進めている。その時になつたら日本が一緒になって核を使う。日本では反対が多い、その世論対策をどうするかということまでシミュレーションしています。

新聞記事を読んだ時に、きっと背景があると。調べてみたら笹川平和財団、ウクライナ戦争が起きてからよくテレビの識者の中でたびたび笹川平和財団の人が出ていました。この笹川平和財団が指南している、提言書を出している。日米が協議するその理論的な土台をつくる細かい提案書、膨大なものが見つかりました。それを読んで、怒りに震えました。こういうブレーンを使って日本が何を画策しているか、厳しく見極めないといけない。現実を見る力を私たち自身がつけていかないと対応できない、と思います。

ウクライナ戦争が起つてから、広島の原爆ドーム（世界遺産として保存する運動も広島でなされて、保存が非常に難しい状態などを80年保っているので、まだしばらくは持つのではないかと。修復のためにかなり原型を変えている。もっともっとぼろぼろ。最初の頃の写真を見る機会があればわかると思います。）、その象徴の前で1300本のキャンドルを灯して、英語にしているのは世界に発信するためです。NO WAR NO NUKES HET ВОЙНЕ！ウクライナ語で戦争反対。こうしたことを度々やりました。（次の写真）1年経つてもウクライナ戦争が続いているので。これは準備するのは手間取ります。気が付いてみると、報道でも写真を使いますし、何度か全国紙の1面にも出たことがあります、詳細な設計がいります。広いところに1000本とか、足りなければ1500本とか、一つ一つの空きグラスを市民から集めている。不そろいの瓶にキャンドルを入れて灯す。元安川のへりにたっている。火を逃れて飛び込んだ多くの中学生・女子学生も折り重なって沈んで、どんどん溺れて、皆、亡くなつていった、爆心地で



すから。そういう光景が現実にあった、そこなんです。私はいつもキャンドルに火を灯すと、川から亡くなった人たちの魂が帰って来られ、一緒に訴えているような気がその度にします。

何度もその時期その時期にやってきましたが、インターネットで世界に拡散すると、あちこちで使われています。平和団体のWEBサイトを見ると、良く採用してくれている、伝わりやすい方法なんだと。もちろんその時は英語でメッセージも添えて、送ったりします。やはり、端的な言葉ですがそういう方法を取って来ました。これは STOP GENOCIDE IN GAZA もう一遍やらなくてはならないということで、昨年暮れに FREE PALESTINE ! をやりました。

核時代とは、核の開発が何をもたらしてきたのか、振り返ってみなければいけない。一人ひとりの命は地球より重い、ということ。広島では平和教育に必ず使っていた言葉。子どもたちにも命の大切さがわかってくる。ヒロシマ・ナガサキで私の身辺でも沢山、被爆者がいますし、私自身は被爆している歳。原爆の年は小学1年生。直前に田舎に疎開したので、被爆は免れました。父だけが被爆しました。広島大学の先生をしていましたが、学生もみな動員されて工場とかで働いたり、あるいは戦地に送られた学徒も多かった。(家族では) 一人だけの被爆でしたが、核兵器がもたらしたものと言うのは、基町高校の生徒さんが描いた絵をこの会場でも展示されているようですが、脈々と実相を伝えていく、特に次の世代の人が一生懸命学んで、その立場になって、被害者の立場に立って、どう向き合っていくか、特に基町高校は素晴らしい、1年掛けてあの絵を描く。ご覧になつていなければぜひご覧になってください。被爆者の証言を聞きながら話しながら描いていく。もちろん、亡くなった映像などを見ながら、対話しながら描いていく。指導している先生とお話しすることがあります。ついこの間も、被爆者の方は高齢だし、歳とともに病気もたくさん出てきます。つい先だってまで一緒に活動していた方が亡くなる。今年、世界核被害者フォーラムを広島で1カ月後に開こうと準備しています。リーフレットを配布しましたが、ヒロシマ・ナガサキの被爆者の登壇を予定して、広島県被団協の元事務局長、清水さんという方に登壇してもらおうと思っていたら、1カ月前に亡くなりました(清水弘士 7/2 83歳)。急遽、変えなければならなくななりました。その人の話を聞きながら生徒が絵を描いていた。その絵をフォーラムの時にお借りして、その生徒さんにお話ししてもらう予定です。それが追悼になるかなと。そういう現実です。一緒にやってきたそういう方たちが亡くなっています。歳だからとい

パレスチナに自由を！
核絶対否定 戦争反対！ 2024.11.26



核時代とは

核開発は何をもたらしたのか

人一人の重みは地球より重い！

核利用サイクルによる核被害の実態とは

- ・核開発の入り口＝ウラン採掘
- ・濃縮、核兵器製造、核実験、核戦争
- ・原発事故 ・原発労働
- ・核開発の出口
- ＝核廃棄物の兵器利用・劣化ウラン弾

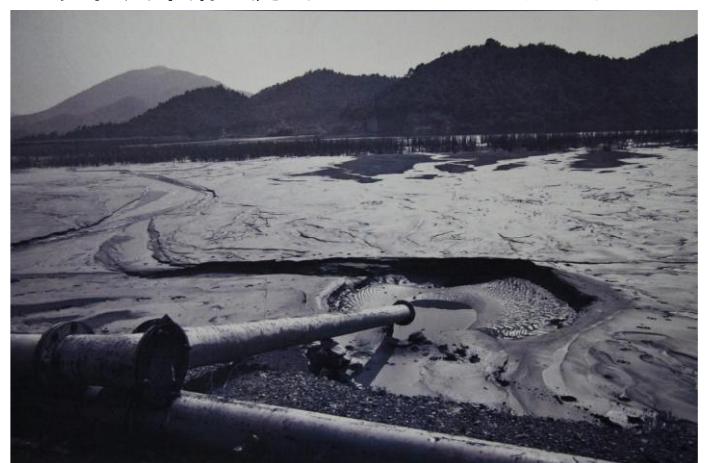
うだけではない、平穏に老衰で死ぬならまだしもですね。私の父も高齢まで生き、最後は老衰で逝ってくれるのかなと思っていたら、胃がんで3ヶ月1滴の水も食事もとれず苦しい状態で亡くなるという、死ぬ間際まで苦しめられてしまうという状況です。

私が運動してきている中で、気が付いていくのですが、核被害者と言うのはヒロシマ・ナガサキの原爆被害者だけではなく、そこに至るまでの核実験の被害者だけでもない。ウランを掘り出すのが最初ですが、ウラン鉱山をまず見つけて掘り出すところから始まる。入口のウラン採掘から、濃縮、原発や核兵器の材料となる、精錬・濃縮という過程そして核実験、2000回以上繰り返してきている。最初はずーっと大気中の核実験だった。被害と言えば、たとえばアメリカでは自国の民を傷つけている。ネバダ砂漠でやるが、風によって全米に放射能が流れていく。のちに乳がんが急増するという現象が起こっています。専門家は原因が分かっていた。皆は知らない。私が知っている広島に来られたアメリカの作家、その人も乳がん。治療しようと思ったら日本と違って、健康保険の保険金が高いから、皆入れない。義務でもない。そのために保険に入らず、治療することは大変に難しかったということです。

核がもたらす被害と言うのは、入り口であるウラン鉱山から濃縮して核兵器を造る工場のまわりももちろん汚染されます。核実験はその最たるもの、そして核戦争。悲劇的な結果をもたらす。もう一つは原発事故。原発労働を担う沢山の人、それから核開発の出口と言っていますが、核のゴミができる。処理の決定的な方法はない。何千年、何億年先まで地下に封じ込めるという策があると、日本でも貧しい地方自治体を説得して、おカネをばらまきその力で建てようとしていますが、住民も抵抗していますから、いまだに見つけられない。さらに、廃棄物を兵器にまで利用している、劣化ウラン弾です。劣化ウランはコソボの紛争で大量に使われました。アフリカでも、紛争のある所で使われる。一番たくさん使ったのはイラクの湾岸戦争1991年、それから2003年からのイラク戦争。直接行って来たので、それをお見せしたい。

これはインドのウラン鉱山(写真)。廃液ダムという。泥状の大きな湖。ジャドゴダという奥地で行くのが大変でした。隔絶された社会、そこに住んでいるのは先住民、インドはヒンズー語ですが、その先住民は15ぐらいの部族がある。それぞれ言葉が違う。言葉に対応する文字はない。そういう隔絶された社会。独特の文化を持っている、そこに興味を持ったシュリ・プラカッシュという一人のドキュメンタリ映画作家が見た光景が異常な事態が起こっているということに気が付くわけです。「ブッダの嘆き」という映画を作りました。地球環境映像祭、東京であり、大賞を得た。広島に来たいということで、私たちが迎えて上映会をしました。本当に衝撃を受けました。こんなことが起こっている、知っているつもりが何も知らなかつたんだと。(次の放射能障害児)それで、直ぐに出かけることにした。それで撮ってきた写真。子ども達が犠牲になっている。先天性障害、身体的障害、知的障害。一目見れば分かり

ウラン鉱山製錬所からの放射性排水をパイプ管で先住民集落に流し込む インド・ジャドゴダ



ます。(次) 17歳と言っていましたが子どもです。全く歩けません。這っている。

(次) 寝たきり、(次) これは胸を突かれましたが、お母さんが抱いている、赤ちゃんだと思ったが、6歳。目が片方全く開けない状態。写真を撮るのもためらう。しかし、記録して報告しようとの気持ちがあるので、ためらっているのですが、お母さんは撮って欲しいという感じで示される。で、こういった人たちを撮って。この少年もそうですね。時間があれば、その時の映像をお見せします。

インド・ジャドゴダ・ウラン鉱山 知的身体的障害をもつ 17 歳 の少年



この写真はインド・パキスタンが 1988 年に両国が相次いで核実験をして、核保有国になりました。それで大変だと、若い人を教育するために広島に呼んで、その前に私なんかが行って、核を持ったらどうということになるのかということを、国民全体が(核を持ったことで) 誇らしさに満ちているわけなので、そういうものではないことを伝えるために行脚を組んだ。そうしたら分かった。若

インド・ジャドゴダ・ウラン鉱山 放射能被害障害児



知的・身体的障害を持たされる6才の
子を抱く母親左目欠損で生れる



ジャドウゴダ核被害者リハビリセンター建設支援



い人を教育して欲しいと、5回に11人ずつ、インドから呼ぶならパキスタンからも同時に呼ばないといけないので。敵対している国だから。ジャム・カシミール地方という境界にあるヒマラヤ山中の一部ですが、そこで戦争が起こっていますね。今でも。核を持って対峙する国になっている。それで先ほどのようにシュリ・プラカッシュに頼んでここに連れて行ってもらったわけです。

科学的な証明をしなくてはならない。この人たちは何の教育も受けていない先住民の人ですが、こういうことが起こっているのは祖先が山から毒蛇を掘り起こすなという言い伝えをしていたのに、人間が掘り返したから祟りが自分たちに来たんだと、族長さんに聞いた。シュリ・プラカッシュ監督が入って教えていく、これはウラン鉱山の放射能による被害だと。それで闘いに立ち上がる。ジャルカンド放射能反対同盟というものを結成します。それが、どんどん抹殺、暗殺される。そこは唯一のウラン鉱山（国立）、鉱石をとつたらウランを精錬して、イエローケーキ（パウダー）を作る。その工場は鉱山の直ぐ傍にある。そこから、さっき言った廃液が出てきます。ウランを抽出するのに大量に使う。廃液には大量の放射能がある。それを平和に暮らしていた自給自足の住民の土地を奪って、廃液ダム、どんどんたまって、次々作っていく。それから鉱碎、大きなボタ山ができる。そういうものの犠牲になっているのが、先住民。多くの女の人は不妊に、産んでも先ほどの様な障害を持つ。男たちは農業ができないので、必然的にウラン鉱山に働きに出る、何の防御もなしに、元々の生活習慣にある素手・素足。そのまま、鉱山の奥に入り、穴の中で働く。帰ったらその服を女たちが洗う、結局、家族全員が汚染されていく。その結果が先ほどの写真です。

これはインドだけではありません。アフリカでは欧米、中国がいろんな鉱石を掘る。ウラン鉱山は世界各地にあって、どこも似たようなことが起きています。アフリカのコンゴはベルギーの植民地だった、いまは独立していますが、酷い状況で掘られ、今は閉山されていますが、盗掘が行われています。非常に高濃度のウランが出るので広島・長崎のマンハッタン計画に使われたシンコロブエ鉱山です。そこから、今回の核被害者フォーラムにお呼びしています。今回の核被害者フォーラムにお呼びするのに大変な困難がありました。ビザが出ない、帰れなくなるかもしれない。

アメリカは大気中核実験をやっていた。その滓を使った劣化ウラン弾を大量に使ってきました。今も全く禁じられていません。イラクに行って撮った写真。これは湾岸戦争の結果が出ている。次のイラク戦争でも同じことが起こっていて、今も続いています。沢山の子どもたちが傷付いたり、あらゆる

広島原爆用のウランが採掘されたコンゴ・シンコロブエ鉱山・露天掘り



採掘労働者は裸同然の無防備な姿で高濃度の放射線に曝された



がんに罹り犠牲になっています。

米・ネバダ核実験場1952年から40年間100回の大気中核実験、921回の地下核実験



1970年12月18日：10キロトンの爆弾「ペインベリー」の地下爆発は巨大な放射能雲を引き起こして、核実験場の全職員を約247ペタベクレルの放射性微粒子にさらし、カリフォルニア、アイダホ、オレゴン、ワシントン各州に核降下物をもたらした。写真：米エネルギー省

バスマの病院では、少女は白血病が脳に転移し腫瘍が飛び出している。



キャンドル文字の”BAN DU NEXT”というの「次は劣化ウラン弾禁止を」という運動です。福島でも大変なことが起つて、2015年に第1回核被害者フォーラムを広島で開きました。10年経ちましたので、再び、いま開こうとしています。

イラク・劣化ウラン被害6才・白血病及び先天性知的障害児の子を抱き示す母親



母親は問う、”女の子？男の子？”ではなく、”正常か？生きているか？”我が子が生まれ出た時に！



劣化ウラン被害の白血病に苦しむ少年



次は劣化ウラン兵器禁止だ！

BAN DU NEXT ! 2008. 12 原爆ドーム



ここで私たちが目指しているのは世界の核被害者の権利憲章を出そうと、今練っています。核時代を終わらせない限り、人類はいつでも核被害者となる、あるいは核によって滅ぼされる、「核と人類は共存できない」、これは父が編み出した言葉ですが、「核兵器と人類は共存できない」と言わますが、本人としてはあらゆる核を否定しています。原発を含む核ですね。そうでないと、原発がある限り、プルトニウムがどんどんできる、核兵器の材料がどんどんできるし、核被害は増えていく。私たち自身が核被害者にもなりますし、人類の絶滅を招きかねないのです。

最後になりますが10月5,6日に機会がありましたら、参加してください。世界中から核被害者を、特に鬪っている人たちです。前回は支援している専門家が多くた、実際の被害者の方は身体的なこともあります難しかった。今回は核被害者自身が、特にアメリカ先住民には沢山のウラン鉱山があり、核廃棄物を捨てられています。もともと、Native American、インディアンですが、そこの土地に追いやられた訳ですね。アメリカ大陸を侵略された。そういう人たちが犠牲になっている。世界各地からいろんな被害者を、もちろん国内では福島原発被害者、広島・長崎の原爆被害、そういったことに取り組んでいる当事者、専門家を呼んで実施しようとしています。

ヒロシマの被爆当事者のほとんどが亡くなっていますが、私たちが引き継いでいかなくてはなりません。力の文明の頂点に核時代をもたらしたわけですから、それを否定して、私たちは「愛の文明」に向かうことが命題であると思います。核開発は必ず国家や大

World Nuclear Victims Forum
世界核被害者フォーラム in 広島 2015.11



2025年10月5日(日)～10月6日(月)

場所：JMS アステールプラザ JMS Aste Plaza (広島国際青少年会館)

ヒロシマの思想一先人・森瀧市郎の哲学
力の文明二核の時代

核開発は、国家や大企業の強き側により使用され、弱き者への差別抑圧、人権無視の上になりたつ。

核文明の根底には

権力による支配抑圧するものと

権力によって差別抑圧、無視されるものとの関係が横たわる。

核絶対否定 人類は生きねばならぬ

核と人類は共存できない

- ・人類が核を否定しない限り、核によって人類が否定される
- ・核の開発利用は構造的に差別・抑圧・人権無視の上になりたつ
- ・核被害者の多くは先住民、子供、女、原発下請け労働者、太平洋諸島原住民など弱き立場の者
- ・被爆しない権利を人類として求めていく

企業の強い側によって使用される。弱い者への差別、抑圧、人権を完全に無視した上に成り立っているのが今の核時代ではないかと。その意味で、核を絶対否定していかなければならぬと思っております。

私は核被害者と生きていくという立場で続けていきますし、私たちがすでに核被害者だと思います。世界中にこれだけいろいろな形で放射能がばらまかれてしまっている、その状況の中にいるということです。私は専門家ではありませんが科学的な調査をしてきました。専門家を連れて、科学的な証明をしてもらいました。イラクの劣化ウラン弾現地調査も戦火の中を私は行ったんです。そこでサンプル、尿とか土壌などを持ち帰り、専門家に分析してもらう、そういうことで被害が実際に裏付けられていく努力も、私たちはしていかないと、核を持つ権力と言うのは国家であれ、企業であれ、たちうちできない気がしております。

私は先のない人間ですが、自分たちの地球、自分たち自身の存続を守っていくために、皆さんとともに力の限り頑張っていきたいと思います。